

## ～バレエを習っている女の子が同級生の男の子にレオタード姿を見せたら欲情されて、イチャラブセックスする話～

夏の午後、優奈の部屋に湿った空気を運んでいた。高校1年生の優奈は、机の上に広げた英語のノートを眺めながら、扇風機の風に長い黒髪をなびかせていた。制服の白いブラウスが汗で少し背中に張り付き、暑さに負けそうだったけど、細身の体を姿勢良く保っていた。黒髪ロングで育ちが良さそうな上品さが漂う優奈は、バレエを8年続けてきたこともあって、どこか落ち着いた雰囲気を持っていた。彼女の部屋はシンプルで整頓されており、バレエシューズや練習着が棚に並ぶ一角だけが、彼女の情熱を静かに物語っていた。

机の向こうには、同じクラスの奏が座っている。彼も制服のシャツの袖をまくり、ネクタイを緩めてノートにペンを走らせていた。秀才と呼ばれる奏は、授業中の難しい問題をサラリと解くタイプで、真面目さが滲む几帳面な字がノートに並んでいる。でも、そんな彼が夏休みに入ってすぐ、「期末テストの英語、2人で復習しない？」と優奈を誘ってきたときは、少し意外だった。優奈は一瞬迷ったけど、「じゃあ、家に来てもいいよ」と答えてしまった。奏の提案にどこか安心感を覚えていた彼女は、彼の真面目さと優しさにずっと惹かれていたのかもしれない。

2人の関係は、2学期の席替えで隣になってから始まった。夏

休み前の最後の授業日、教室の窓から暑い風が吹き込んでいた。優奈は英語のプリントをまとめながら、隣の奏が教科書に書き込みしてるのに気づいた。「何？また難しい単語でも調べてるの？」と小声で聞くと、奏はペンを止めて笑った。「いや、ただのメモだよ。優奈ってさ、バレエやってるって聞いて意外だったんだよね。上品そうだし、静かなイメージだったから。」「バレエだって真剣にやってるよ」と優奈は少し首をかしげて答えたけど、彼の興味が嬉しかった。奏は机に肘をついて目を細め、「優奈が踊ってるとこ想像すると、なんか優雅でかっこいいだろうなって。俺、バレエは分からないけど、一度見てみたいな」と言った。「学校の発表会でもないのに？」と優奈がからかうと、「うん、発表会じゃなくてもいいよ。優奈が踊ってるとこ見たいだけ。友達としてさ」と返してきた。その言葉に真剣さが混じってて、優奈は目を逸らし、「...考えておくよ」とだけ答えた。その会話が頭に残り、夏休みにこんな形で実現することになったのだ。

「ねえ、この単語の発音、合ってる？」優奈がノートを指差すと、奏は顔を上げて軽く笑った。「いや、ちょっと違う。優奈、発音してみてよ。ていうか、暑すぎて頭働かないよ。」彼の口調は軽いけど、真剣に聞いている様子が伝わってきて、優奈も小さく笑った。2人は机を挟んで向かい合い、ノートや教科書を広げていたが、夏の暑さに集中力が途切れがちだった。扇風機の風が優奈の髪を揺らし、彼女の額に浮かんだ汗が一滴、頬を伝って落ちた。

「少し休憩しようか。喉乾いたし。」優奈が立ち上がると、奏がふと口を開いた。「なあ、優奈ってバレエやってるよね？レオタード姿、見せてよ。」

優奈は一瞬固まった。言葉が耳に届いた瞬間、彼女の頭の中が真っ白になり、心臓がドキッと跳ねた。「え、ここ家の中だよ...」と慌ててごまかそうとしたが、奏の好奇心に満ちた瞳が彼女をしっかりと捉えていた。（レオタード姿って...そんな急に言われても...）と心の中で呟きながら、優奈は頬が熱くなるのを感じた。彼女にとって、レオタードはバレエ教室でのみ着る特別なもので、誰かに見せるなんて考えたこともなかった。ましてや、奏のような近い存在に、こんなプライベートな姿を見せるなんて。

## 登場人物紹介

### 優奈（ゆな）

身長158cmほどで、バレエで鍛えた細身の体型が特徴。長い黒髪は腰まで届き、普段はゆるく巻いてポニーテールにすることが多い。肌は白く、汗ばむと少しピンクがかって上品さが際立つ。顔立ちは穏やかで、大きな瞳と小さめの鼻が育ちの良さを感じさせる。レオタード姿では、細い腕と脚の筋肉がほのかに見えて、バレリーナらしい優雅さが漂う。

真面目で控えめな性格を持ち、育ちの良さが滲む穏やかな態度が特徴。バレエに対する真剣な取り組みは彼女の内面の強さを示し、感情を内に秘めながらも、奏に対しては深い愛情と信頼を寄せる。静かな情熱を内に秘めた、繊細で純粋な少女。